

2013 年

JIA 近畿支部

学生卒業設計コンクール

最優秀賞



つく田 将紀 (大阪大学 工学部 地球総合工学科)

「雨読」

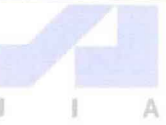
最優秀賞

雨読



▶ 大阪大学 地球総合工学科
つく田 将紀

2013年 JIA近畿支部 学生卒業設計コンクール



Concept

雨の図書館。

雨によってもたらされるいつもとはほんの少し違った日常。

降り響く雨の音は周りの音をきき消していく。
降り注ぐ雨粒は緩やかに視界を遮っていく。

いつもとはどこか違う日常を割り出してくれる、雨。
そんな雨の効果を用いて、本を読むために適した空間を生み出す。用いるのは雨の「音」と「濡れ」。ホワイトノイズである雨音はマスキング効果により周囲の雑音を掻き消し、濡れたガラスは重なりあう事で私たちの視線を遮っていく。
挿入されたガラスの筒によって読書空間内に伝えられる雨によるこの二つの現象は、奥に進むにつれてその効果を増していく。
人の読書時の意識状態の推移を落とし込んで構成された一続きの空間は、奥に進むにつれ徐々に雨に満たされ、静けさを増し、より読書に適した空間へと変化していく。

雨読

鳴り響く雨の音は周囲の喧噪をかき消していく。

降り注ぐ雨粒は緩やかに視界を遮っていく。

雨によって切り取られる日常。

ここは雨の図書館。

雨の効果がより良い読書空間を生み出す。

用いる雨の効果は二つ。雨の音と雨の雫によるガラスの濡れ。

雨音

雨の音は広い音幅と多様な高さを併せ持っており、
代表的なホワイトノイズにあたる。

ホワイトノイズには他の騒音をかき消す
マスキング効果があり、
集中力を高める効果が確認されている。



雨滴

雨によって濡れたガラスは緩やかに視線を遮る。
流動する雨粒、雨水による光の屈折が引き起こす
視線の遮断により周囲と切り離された空間を生み出す。

人の読書時の意識には複数の状態がある。

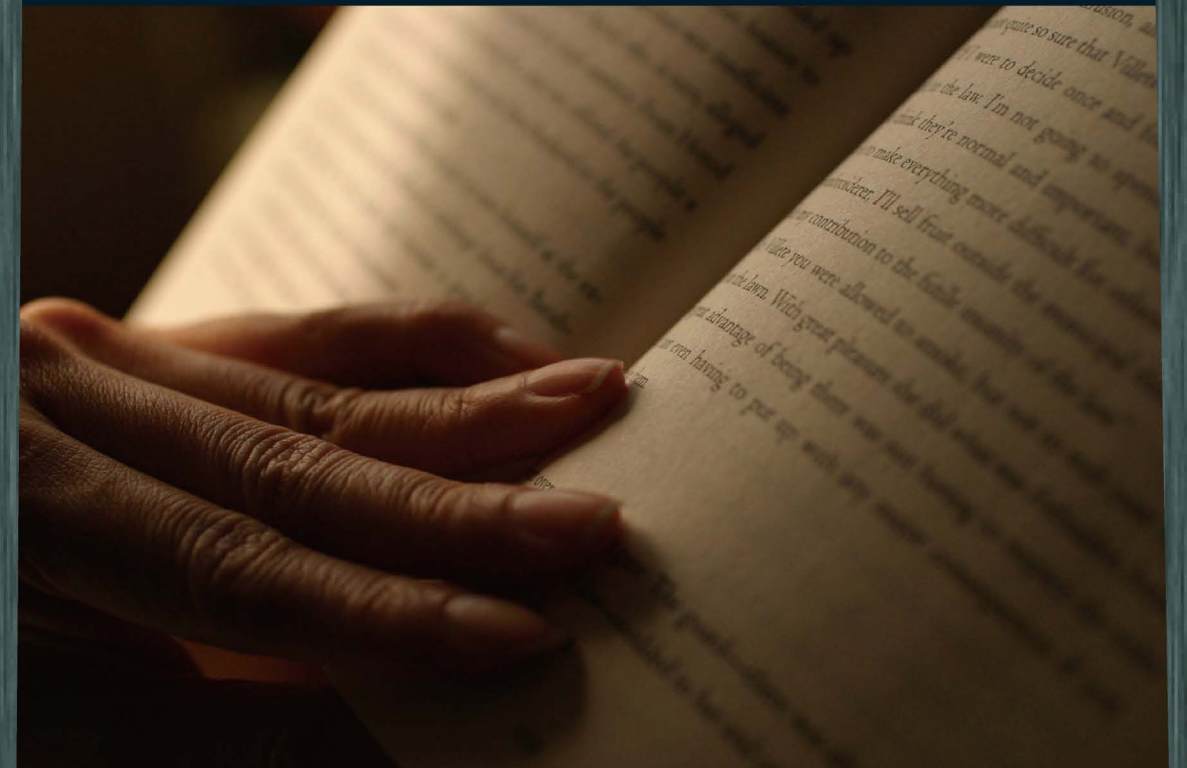
導入、没入、余韻などといった状態である。

例えば小説であれば、

読者ははじめ登場人物や舞台設定を意識的に想像し、
徐々に意識せずして物語を頭の中に描き始める。
そしてやがて自らも物語の世界に没入していく。

この読書時の人の意識の状態を

図書館の空間構成として落とし込んでいく。

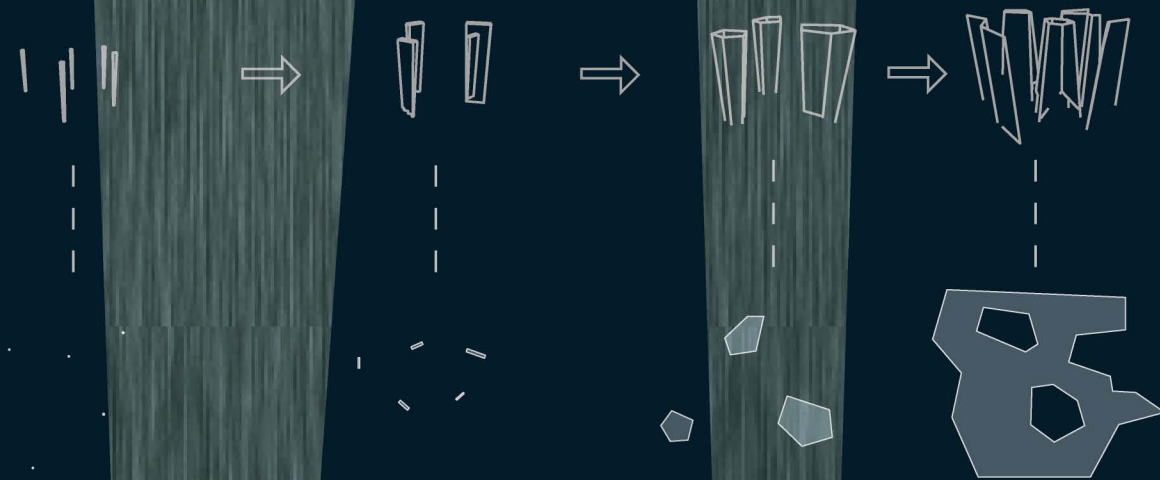
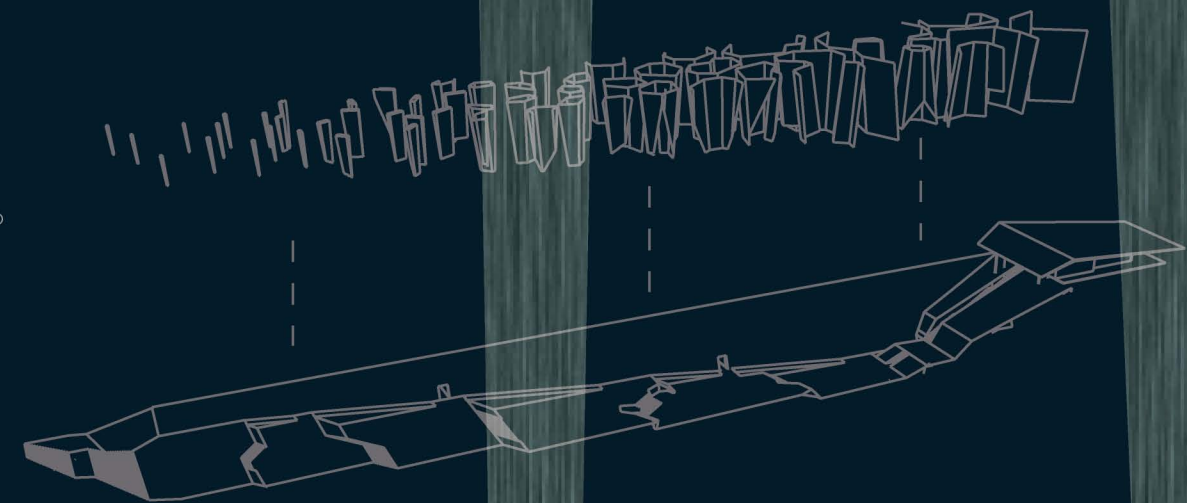


池の中に建てられた図書空間内にガラスの筒を挿入していく。

このガラスの筒は「雨音」「雨滴」の二つの雨の効果を建物内に導く働きを持つ。

ガラスを叩く雨はホワイトノイズを生み、

ガラスを伝う雨の雫は緩やかに視線を遮る。



ガラスの筒は導入部から、奥に進むにつれて徐々に大きくなっていく。

雨を引き込む面積が大きくなるにつれ、雨音は大きくなり、

マスキング効果により周囲の雑音はかき消されていく。

同時に、濡れたガラスの重なりが増えていく事により視線の遮りも増していき、

次第に遠くが見渡せなくなっていく。

水面下に降りていく行為は

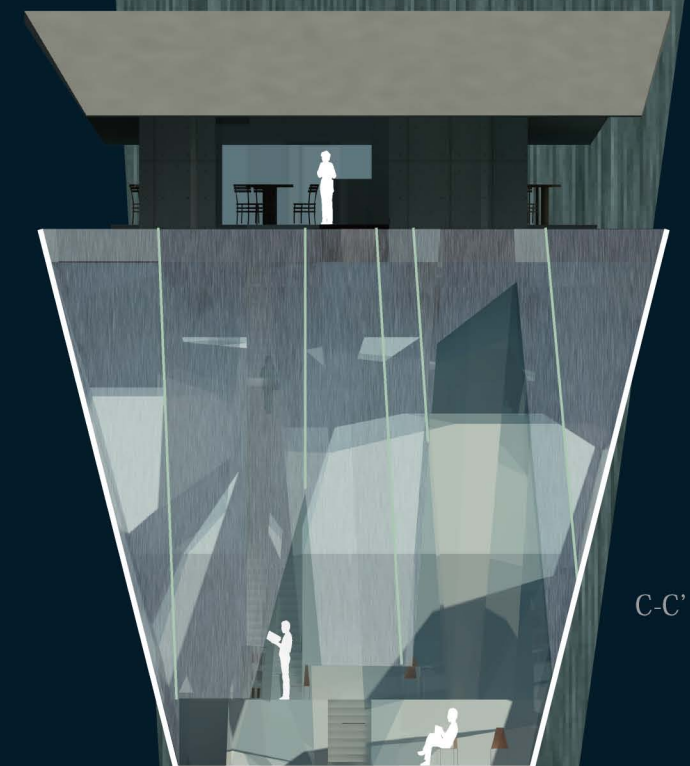
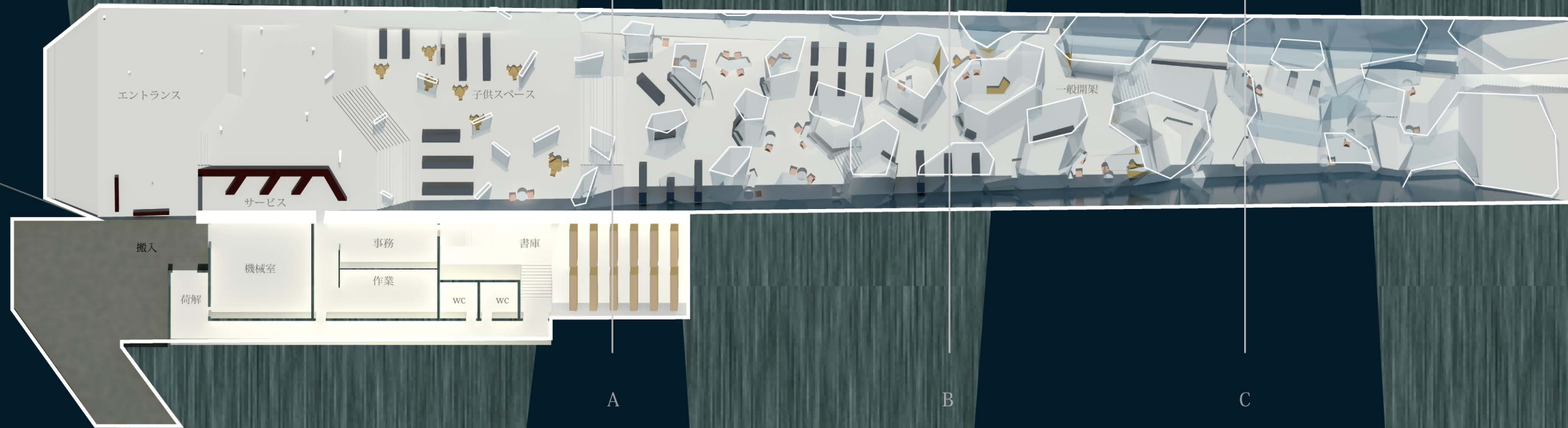
読書時の異世界へと足を踏み入れる感覚を呼び起こし、

さらに、徐々に雨に満たされていく図書空間を奥へと進む事で、

より日常と切り離された空間を体験することになる。



plot plan



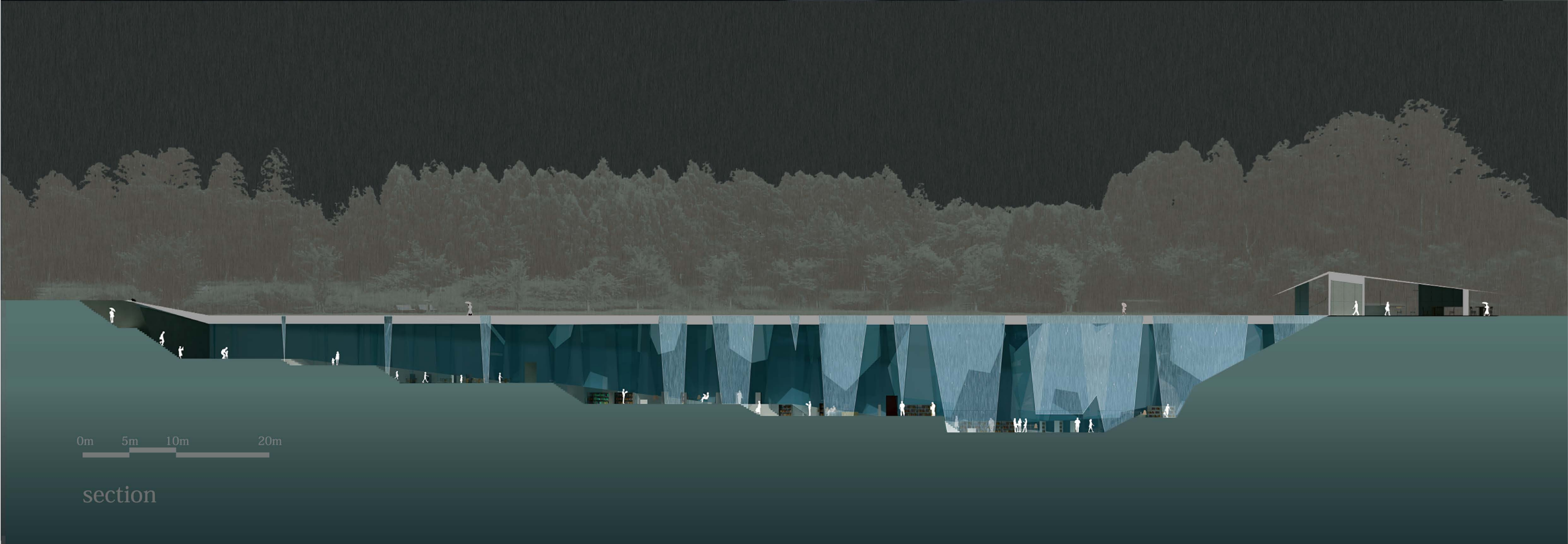
section / S=1:200



外観パース



カフェ内観パース



0m 5m 10m 20m

section

雨の日はここで本を読もう。

雨に切り取られた、いつもとほんの少し違ったこの世界で。

